

天空の郷地域福祉フェスティバル in 久万高原
第2分科会「集落の未来を考える！」議事録

1. 開催場所：久万高原町産業文化会館
2. 開催時間：～午後3時45分
3. テーマ：集落の未来を考える！～地域資源を活用し共に創る地域～
4. コーディネーター：

NPO 法人 いよココロザシ大学 理事長 泉谷昇

パネラー：

伊予市地域おこし協力隊 富田敏

喜久家プロジェクト 副代表 浅野長武

田んぼの学校 元校長 竹内英一郎

美川地区代表 坂口大作

5. 議 事

開会 午後1時30分～

鈴木千春実行委員が、BGMは町内在住の石水氏提供の久万高原町面河川本流から湧水が流れ落ちる音であると紹介し、町内には素晴らしい自然という地域資源があり、本分科会では、久万高原町の自然や空き家という地域資源を活用することにより集落にもたらす明るい未来について考えることになっている旨会場に伝え、開会宣言。

泉谷コーディネーターが、本分科会では地域資源を活用して活躍しているパネラーの事例発表をとおして、意見交換などを行っていききたいと述べ、審議開始。

パネラー発表。

①富田パネラーが、「グリーンツーリズムの実践から」と題して、しずむ夕日が立ちどまる町、伊予市ホタル保存会の取り組みを発表。

- ・現役の木材校舎では、愛媛県内で一番古い小学校伊予市翠（みどり）小学校の周辺の所で取り組みが始まった。
- ・30年前にホタルの姿が見えなくなったことをきっかけに、昭和57年に地域の有志10人が十進会という組織を作り、ホタルの復活を目指した。
- ・十進会の活動は、ホタルの幼虫育成、カワニナの放流、農家に農園改善の呼びかけなど。
- ・昭和62年にホタル祭りを開催。毎年多くの参加者があり、子どもの相撲大会もしている。
- ・平成に入ってホタル保存会ができて、現在では地域の方100人程が活動に参加している。
- ・ホタル保存会の活動内容は、ホタル祭りの開催、ホタルの養殖と環境整備、自然保護活動。
- ・グリーンツーリズムの実践は、道の駅ふたみシーサイド公園の来客を翠地区に少しでも呼び込むことを目的として、ホタルの里グループが豆腐やこんにゃく作り、石窯ピザ作り体験を実施し、年間5000人の来客を得ている。
- ・県内最古の木材校舎である翠小学校を残すために、2年間の話し合いの末、環境省の学校エコ改修事業で校舎の改修をした。
- ・今後の取り組みとして、双海町の人口減少、少子化とホタル保存会メンバーの高齢化がある。後継者や担い手を考えると、移住の受け入れが必要と判断して、受け入れ事業を開始した。

同時に環境美化と暮らしやすい町づくりのため、子育て支援などの生活面についての取り組みも進めているところである。

②浅野パネラーが「若者ボランティアと共に郷づくりの実践から」と題して、喜久家プロジェクトの取り組みを発表。

- ・世界各国の若者ボランティアと活動しており、今日はイタリアとベルギーの二人の若者に来てもらっていると、自己紹介を促す。二人が日本語で自己紹介をする。
- ・今は目に見えていないものでも、いつか地域の宝になるものもある。
- ・喜久家プロジェクトの映像を流し、活動の様子や佐田岬半島の平磯（ひらいそ）という地域について説明をする。
- ・少子高齢化が進行し、課題として後継者がいなくなったミカン畑の増加がみられると共に、郷の元気もなくなり始めたこと。
- ・地域を変えるのは若者、よそ者、馬鹿者という言葉があり、目指したことは交流人口の増加。
- ・ワークキャンプ(共に働く共同生活)で空き家を拠点とし、海外から若者ボランティアを受け入れ、ミカン栽培の作業やその日の食事作りなどを行っている。
- ・「田舎で働き隊」という国の事業があり、3名受け入れて共に灯台付近の清掃などした。
- ・地域行事の参加として秋祭りや盆踊りなどに国内、海外問わず若者が参加した。
- ・佐田岬ふるさとウォークの給水ポイントスタッフなども行い、参加者と交流した。
- ・インドネシアから来た愛媛大学の交換留学生と学校訪問をして、ハイチ地震をとおして防災について共に考えた。
- ・松山の子どもたちの田舎体験のため、農業体験を提供した。
- ・毎年3月に、国際ワークキャンプを実施し、10人程の若者がやってきて活動してくれている。
- ・郵便局員と宅急便しか来なかった町に、2〜3年前から若者達がきて、住民との交流が図れている。
- ・地域には伝統や文化の見直し、農業の担い手になろうとしている高校生が今はいる。
- ・若者たちが地域貢献や自信の芽生え、可能性の広がりについて考えるようになってきた。
- ・若者を巻き込む力や育てる力、伝える力をつけたいと思っている。
- ・これまで訪れた若者は外国の若者が76人、日本の若者が51人。延べ人数では310人が訪れてくれており、本当に幸せな出会いである。
- ・若者ボランティアとの別れの朝は「さよなら」ではなく「いってらっしゃい」で送り出す。

③竹内パネラーが「よみがえれふるさと中津の里山」と題して、地域資源である休耕田や廃校を有効活用した地域づくりについての取り組みを発表。

- ・中津の人口は200名程度、120戸程の集落で高齢化率は約58パーセントである。
- ・中津地区住民は結束力があり、公民館活動の参加率は高く、仙台からの移住者も6名いる。
- ・昔は積極的だった田んぼづくりも現在は休耕田が増えている。
- ・平成21年秋に、県の指定を受け、「元気な集落づくりモデル事業」を実施。2年間は住民が一生懸命講師の指導を受け、講師を中津に招き話し合いを行った。
- ・中津を丸ごと博物館にしていきたいという思いで「中津まるごとミュージアム」と総称した。
- ・事業を進めるうちに、私たちの周りにある当たり前のものが、宝物や資源であると感じることができた。
- ・ないものねだりではなく、あるもの探しをしようと考えた。
- ・平成23年に中津大字会がホームページを開設し、累計12万を超えるアクセス数があった。

1日に約150～200名のアクセス数である。

- ・中津に来てもらった人は「風の人」。地元の人を「地の人」と言っている。私たちは「風の人」に何かひとつ有形であれ無形であれ持って帰ってほしいと考えている。
- ・景観、休耕田、音楽、食の文化という4つの地域資源について考えていくこととなった。それぞれが単独で動かず、互いに話し合い、協力し合いながら活動している。
- ・景観については、さくらの里づくり、さくら祭り、菜の花畑づくり、ミツマタづくりを実施している。
- ・休耕田については、田んぼの学校として米を作り、作った米は中津の各種活動で使用している。農業体験活動や生き物調査など、子どもや中津地区以外の人とも交流している。
- ・音楽については、音楽の里づくりとして春夏秋冬を通じて音楽イベントを実施。出張音楽会も行い、旧中津小学校は録音施設や宿泊施設として活用している。
- ・食については、公民館活動による食事づくりとして田んぼの学校や音楽の学校活動時の食事づくり、さくらまつりの際の食事づくり、また中津の地元食材を使用しての食品づくり、その他各行事の食事づくりや餅つき実演販売などを実施している。
- ・4つの主な活動の行事は、今年で4年目となる。結果として参加者の増加、新しい活動内容の充実、みんなの楽しみとなり、中津以外でも話題となって、地区内外の交流の充実が図られることとなった。

④坂口パネラーが、久万高原町の地域資源を活用していくことによる効果や可能性について地域資源活用「お宝探し隊」としての報告をする。

- ・作業部会の積み上げの中で、久万高原町にお宝と呼べる地域資源があるか考えた。
- ・緑豊かなこの町で考えたお宝は「水」つまり「川」であり、それに関連するイベントができないかと考えた。
- ・平成23年度に「四万十川」を抜いて「仁淀川」が日本一の清流となった。この「仁淀川」を遡ると県境を越えたところで名前が変わり「面河川」となる。
- ・町内には「仁淀川」にも負けない川がたくさんある。久万高原町は日本一きれいな川が流れており、その中で私たちは生活している。この地域資源を活かしたイベントができないか。
- ・例として、河川付近にある空き家や廃校などを利用し、そこをベースキャンプとして年間をとおして色んなイベントができないかというところまで作業部会で考えることができた。
- ・「お宝探し隊」としては、「水」「ホテル」「源流」といったキーワードから日本一の源流を遡る源流ウォーク、自然を撮影したフォトコンテストの開催、廃校を利用した親子キャンプなどの企画を考えた。
- ・地域資源を活用することの効果や可能性は、充実した時間を過ごすことでやりがいや生きがいとなり、活力のある生活を送ることによりみんなが元気になれるのではないかなと思う。
- ・活動の大切なことは参加者がとにかく楽しむことである。このままではいけない、放っておけない、何とかしないといけないという強い思いが町おこしなどにつながっていくと思う。
- ・地域資源の活用については風土があるとか物があるとかだけでなく、活かす人が大切であり人材が必要不可欠になると思う。

泉谷コーディネーターが、活動していく上で「活動者の前に立ちほだかっているものをひとつ教えてほしい」と言われたら何と答えると質問。

○富田パネラー…後継者の事である。10人の仲間が始まった活動であるが現在は10人欠けている状態である。100名以上のホテル保存会も後継者をどうするかと考えている。

グリーンツーリズムも後継者を育てるために始めたというところもある。後継者の問題は、30代の若い世代の参加があり若干クリアになりつつあるが、少子化問題など児童数は地元の子供10名、保育所は2人もいない状態である。学校の存続も心配である点を考えると移住受け入れの必要があるという事だと思う。

○浅野パネラー…国内外から沢山の若者が来てくれているが、彼らの能力を受け入れている私たちが、活かし切れていないのではないかという課題があると思う。若者から「行きたいと思っている時に、受け入れてくれる人や場所がある。それだけで充分であり、何を確かめ、何をするかは私次第だから」という言葉をもらった。

○竹内パネラー…地域資源は自分の周りにあるものだから、本当に気づかない。生活の中で、何が良いものか分からなくなることが課題と考えている。

外から来る「風の人」に、私たち「地の人」は元気をもらう。どうしたら「風の人」に沢山来てもらえるか。田んぼの学校の応募者をインターネットで募集したら、親子合わせて20名だった。もっと来てもらうためにはどうしたらいいか考えている。

○坂口パネラー…実行例はないが、これからの課題は沢山あり、一番は予算的なものだ。

お金・人材・アイデアと何にもない。

娘が河原にある石ころを拾い「お父さん、私にはこれがお猿さんに見えるんよ。お猿さんがあぐらをかいてお猪口でお酒を飲みよるんよ!」と言った。石をどういう目線・目的で拾うのか。拾う勇気やひらめきがあるのかということが、基本姿勢だと思う。

泉谷コーディネーターが、会場に対して質疑応答を促す。会場から特になく、パネラーに対して、地域資源を活用し、どういった未来を目指しているか、自分たちの地域がこうなればということがあるか質問。

○富田パネラー…ホテル保存会の活動から、グリーンツーリズム、石釜焼きピザ体験などは、外部との交流と収入源の確保になっている。将来的にも商売であるため利益を追求するのも必要であるが、参加者との交流も大切にしていきたいと思う。そのことによりリピーターがいてくれると思っている。

○浅野パネラー…活動が続けることができたのは、出会いや感動があったからだと思う。今後も若者ボランティアにとって、この町を故郷と思ってもらい、再会したい。外からの若者によって私たち地元の者は、故郷の良さを気づかせてもらい、日々の力になっていると思っている。

○竹内パネラー…中津まるごとミュージアムを始めるときに、講師から「ボランティアだけでは活動できない。年金プラスαも大事ではないかな」と言われた。現実的に考えて、年金プラスαがないと、活動の継続は難しいのではないかと考えている。

泉谷コーディネーターが、「活動が続けていくにはヒントがあり、地域資源を活用して1つの活動に留まっていないということがある。地域資源は1つではなく、関わる人によって変化するため、その変化を拒否し、頑なにこれがやりたいと頑張ると負担が大きいのでは変化してもいいと思う。」と意見を述べ、来場者に対して質問がないか問いかける。

○来場者…竹内パネラーの年金プラスαといった意図を教えてください。

○竹内パネラー…年金プラスαは、自分もそうだが年金生活のため生活が苦しいこともあるため、活動する上で、多少なり、跳ね返りがあったらいいという意味である。それが活動の1番の目的ではない。しかしボランティアだけでは困難なところも現実あると思う。1日いくらでもよいので、少しでも収入があれば、自分の出番もあったんだと、次のステップアップにもなるのではと思う。

- 泉谷コーディネーター…海外の事例だが、アメージングというサービスがある。これは50歳以上でないと先生になれない学校があり、インターネットで申し込みを行っている。1人あたり15ユーロで、先生も70歳や80歳もおり、知識や経験を生徒に教えている。先生となった高齢者は年金プラス α の α で自分の孫におもちゃを買ったり、自分の趣味などに使っている。
- 来場者…坂口パネラーから面河川の美しさについて話があったが、深く同感する。面河溪谷、西日本一番の石鎚山などは、宝物であると思う。だが、昔に比べて来客など減少していることが、もったいないと思うので坂口パネラーの思いに感銘している。これからも輪を広げてもらいたい。
- 坂口パネラー…戦後、伐採された広葉樹が（植林により）杉や檜という針葉樹になり、山の保水能力が激減している。また、高度経済成長期で人口が急増した事により、生活排水が河川を汚している。最近になり三坂道路ができて生活が便利になったが、道路整備などをしたことにより、水中生物が減少している。悪い言い方にはなるが、このまま久万高原町の人口が減少したら生活排水も減り、杉や檜も樹齢が100年を超えると、ほぼ広葉樹と同じ保水能力となってくる。時代の流れで環境的には昔に戻りつつあるので今より面河川が汚れることはないと感じているので、久万高原町の水はきれいという自負を皆さんにはもってもらいたい。

6. 閉会

泉谷コーディネーターが、地域資源の活用、実践報告、課題についての発表をしたパネラーに対し、労いの言葉を伝え、分科会の終了を告げる。

鈴木実行委員が分科会閉会後に分科会報告があることを述べ、閉会宣言。